

政治の理念と教育の理念

斎藤 武雄

一はじめに

プラトンにおいてのみでなく、真に生きた哲学、すなわち現実的な哲学は、古来、政治哲学でもあり、また教育哲学でもあったであろう。なぜなら、人間は、「状況——内——存在」であって、状況ないし世界を道徳的ならしめ、知識技能を媒介して生活を改善し、そして人間そのものを向上させようとする理想を、その本性からのものとして、もっているからである。

ヤスパースも「人間であることは人間となることである」⁽¹⁾と言うが、政治も教育もともに人間であることをめざすものであり、両者とも真の人間となることがその目標である。このような政治も教育もともに実践的である。そして、「人間となること」は実践を、すなわち、行為を通さなければならない。

しかし、政治的行為と教育的行為との間には、類似点ないし共通点があるとともに、相違点もある。それに就いての細谷恒夫氏の所説を先ず次に述べよう。

「政治的行為も教育的行為とともに、他の人にはたらしきかけ、その人の行為を、一応自分の思うような方向にうごかし、それによってよりよき社会を形成しようとする

点では、共通のものをもっている。」⁽²⁾「しかし政治的行為とは、本来また終局的には、力による支配に外ならない」⁽³⁾のであり、「他人の行動が、どのような動機や心情の下で行なわれたかということとは、政治的行為にとって必ずしも本質的なことではない。」⁽⁴⁾これに対して、教育的行為すなわち「教育によって人を動かすということ」は、教育者と教え子との共感的な交渉を基底とし、教育者の教える事柄自体に対する教え子の理解、それによる教え子自身の決定による行動の変更ということなのである。」⁽⁵⁾「教育は教育者と教え子との心情が互に共感し合う」⁽⁶⁾「共感的交渉をその基底としなければならない。」⁽⁶⁾

以上細谷氏の説くように、政治的行為は必ずしも内面的心情や自覚なしにも成立しうるであらうが、教育的行為はただ外面的形式的行為のみでは無意味であり、自覚・関心・共感をその内面にもつての被教育者の人間自身の正しい成長を結果するものでなければならない。

社会的事実ないし現象としては、このように、政治的行為と教育的行為との間には、明瞭な差異があるであらう。しかし、政治も教育も、可能的実存が現実的に実存しうるように成るための文化活動として、その理念においては同一のものに根ざすものである。

なお、今まで述べたことに関連して、長田新氏の所説を次に述べ、参考にしよう。

「教育の政治化に対して政治の教育化が可能とすれば、政治と教育とは先ずその根柢において同一でなくてはな

らない。本来同じ根柢に立つのでなくては、互に自己を他に化することは出来ない。政治と教育とは本来同根であり、その本源において一体である。と言うのは政治と教育とは既に述べたる如くその理念において精神であり・道徳であり・また文化であって、共に道徳の実現若しくは文化の創造を目的とする。この共通普遍の地盤あって初めて両者は相会し相触れることが出来る。併しこの共通普遍の地盤はただ両者が相会し相触れる場処たるに留って、政治並に教育の具體的の姿ではない。……即ち政治が権力若しくは力の原理に基づくのに教育は自意自発の原理に基づいている。政治が窮極において道徳若しくは文化の実現を理想としながら、権力若しくは他律を自己固有の原理とするのに対して、教育は等しく道徳若しくは文化の実現を理想としながら、権力や他律とは反対に自由若しくは自律を自己固有の原理として、偏えに各自の人格の内からの自己発展に基礎を置く。茲に政治と教育とがその本来の同根にも拘らず決して一を他と同一視することの出来ない特殊性がある。」⁽⁸⁾

このように長田氏は政治と教育との同一性と差異性を見て、両者の弁証法ないし相互規定性を考える。政治は外的なものから内的な教育へ、そして教育は内的なものから外的な政治へと向かう。かくして両者の不断の内的収斂において具体的な歴史的な文化が発展する、と彼は両者の相互規定・両者の緊張関係を強調する。⁽⁹⁾彼のこの所論は、われわれに多くのことを教えるが、更に進ん

で権威と自由との関係を論ずることが、一層望ましいことであつたであらう。

政治と教育との関係の問題は、遠く孔子やプラトンの昔から現代に至るまで、依然として重要な問題である。私はかつて拙稿「ヤスパースにおける教育の意味」⁽¹⁰⁾において、ヤスパース哲学の体系の根源から、教育の意味への接近を試みたのであるが、今は、彼における政治と教育との関係から、彼の教育の意味へと接近しようと思う。

一 政治の理念

ヤスパースの政治の理念は、平和政策の前提を示すところの、言わば平和の根本条件となる次の三条項に示されている。「第一に、人間の内的平和を保つことなしには如何なる外的平和も存在しない。第二に、平和は自由によってのみ存在する。第三に、自由は真理によってのみ存在する。」⁽¹¹⁾すなわち、真理によって自由が、そしてかかる自由によって平和が、可能である、という彼の政治哲学の体系すなわち根本構造がここに示されている。

上述の政治の理念の構造である、真理↓自由↓平和における真理ということ、実存の主體的真理（内容的・客體的真理の可能根柢）のことであり、それは実存の愛（*liebe*）に基づく理性（*Vernunft*）の在り方である。かかる理性によって自由は可能となる。自由の動きは、

理性において可能であると考えられる。」⁽¹²⁾「われわれは理性をすべてを受容理解する公明性 (Offenheit) と称する」⁽¹³⁾のであるが、「このような自由はただ人間の転換 (Verwandlung des Menschen) とともに発生する。」⁽¹⁴⁾

このように「人間の転換」が理性の、愛に基づく公明性によって可能にされて、人間は真の自由を実現しうるのである。理性の、統一↓突破↓統一の無限の運動、理性の徹底的解離 (内在的なものの固定化・孤立化・絶対化を斥けての公明な批判性) という高次の否定性によって、はじめて「人間の転換」は可能にされるのである。

「人間の転換」というのは、実存の愛に基づく理性によって、本来の人間存在たるかかろ愛と理性という根源的真理への転換なのである。それは愛の、そして理性の自己限定といってもよい。このような転換は、ヤスパースにおいても、カントと同様に⁽¹⁵⁾、政治哲学の根本問題である。かかる人間の転換は、「転換の心構えのできた人間同志の交わり (Kommunikation) の態度と切り離せない」⁽¹⁶⁾といわれるように、それは理性による交わりによって可能にされる。「交わりのない真理は理性にとって是非真理と同一である。」⁽¹⁷⁾

「平和政策は世界政策である」⁽¹⁸⁾が、「かかる世界政策は、各人が自ら自身において、われわれがわが国において、それを実現するという諸前提においてのみ成功しうるのである」⁽¹⁹⁾。そして、「平和は自分の家庭から始まる」⁽²⁰⁾であり、「世界平和は諸国家の内部の平和と

ともに始まる」⁽²¹⁾のである。これは内から外への、すなわち、主体的実存的真理から客体的社会的真理への、平和の発想であって、儒教の『大学』⁽²²⁾における脩身齊家治國平天下の理想とも、また、カントの『永遠平和論』⁽²³⁾の立場とも、その発想の性格において、類似しているのである。

「自由な理性の力をたのみに」⁽²⁴⁾して、ヤスパースは『原子爆弾と人間の将来』という本を書いているように、企図されうる一切のものが企図されてしまった場合に、われわれにとっては、理性をもった人間性への信頼、実存の理性への信頼、これこそが究極のものであり⁽²⁵⁾、それがヤスパースの政治哲学の根本をなすものである。

ヤスパースにおける政治の目標は実存の共同体 (技術社会をふくむ) としてのデモクラシーの社会・国家・世界秩序の実現である。この「世界秩序への道は、少数の歴史的根源から、量的には消えんばかりの少数の人間から出発する」⁽²⁶⁾としても、「世界秩序への道は、できるだけ多くの国家における政治的自由の覚醒と自己理解を経由せずには進展しない」⁽²⁷⁾のである。

上述の如き理性は「超政治的なもの」 (überpolitisch) であり、この理性が「政治的なもの」を導くのである。⁽²⁸⁾

政治の理念の上述の体系は、真理 (愛↓理性) ↓自由 (実存の自由↓政治的自由) ↓平和 (内的平和↓外的平和) という構造関連である。そして、ここで矢印で示し

たこの順序は逆にしてはならない。すなわち、真理↓自由↓平和であって、それは、平和↓自由↓真理ではない。例えば、強力な権力による専制政治においても平和は可能であろうし、この平和において自由も可能であろうし、この自由が真理を弁護しうるであろう、と考えることへ平和↓自由↓真理は誤である。⁽³⁰⁾「まず自由があり、ついで世界における平和がある。」⁽³¹⁾まず平和、ついで自由を、⁽³²⁾という、これと反対の要求は欺くものである。なぜなら、偶然によるかあるいは専制または器用な操作によるか、あるいはまたすべての関与者の不安によるところの、その時だけ存立する外的平和は、人間そのものの根底において保証された平和ではないからである。かかる平和は個人の不自由の事実的不和からただちに戦争へと通ずるであろう。⁽³³⁾平和↓自由↓真理は外面的、便宜的、一時的であり、真理↓自由↓平和は内面的、本質的、恒久的である。

政治の理念の考察に当っては、自由と権威との関係を無視することはできない。それは、真理↓自由↓平和の政治の理念の体系において考えられなければならない。権威は、真理に基づく自由の声を傾けてはじめて権威であり、自由は、権威のもつ真理に対してのおのずから頭が下がるものであってはじめて自由である。自由も権威とともに、上述の如き真理に根源し根拠をもつ限り、真実でありえ、またその限り平和の前提条件なのである。したがって、自由は、権威との緊張関係において真の自

由たりうるものであり、権威も同様、自由との緊張関係において真の権威でありうるのである。「自由と権威との緊張の現実において、永遠の現在に関与すべきである」⁽³⁰⁾これは政治的行為の鏡となる政治の理念なのである。⁽³¹⁾「真の権威はいつでも開いて (open) いなければならぬ」のであり、「真の権威は、深い自己把握により、また他の権威との交通において変化する」ものである。⁽³²⁾そして、真正な権威は「無制限な交通」の用意において「自由を増進させる権威」であり、誤れる権威は「交通を断絶する」ところの「自由を絶滅させる権威」である。⁽³³⁾

三 教育の理念

ヤスパースにおける教育の理念は、絶対的意識としての愛に基づく理性（実存の本来性）による、かかる理性にまでの人間形成ということである。ここに、愛↓理性↓人間形成という彼の教育哲学の根本構造がある。かかる理性は本来の自由（愛に基づく自由）をその性格とするものであるから、それは、真理↓自由↓人間形成といいかえてもよい。この構造は教育の目的論、内容論、方法論、教師論等をすべて貫ぬくのである。

先ず教育の目的について、極めて概括的に要点のみに關して考えてみよう。如何なる人間を形成すべきか。それは、愛（に基づく理性）の人格完成⁽³³⁾が教育の根本目標となる。この愛は、実存の絶対的意識としての愛であ

り、敬とともに（根本的には敬の根源として）あるものであり、公明に自他を真に生かすものであり、実存の交わりの源泉である。それは、超越者に直面して無限に運動する、統一→突破→統一……をなす批判性をもつものである。

そしてこの愛は、精神性（道徳性）と科学性（合理性と実証性）とを統一するものである。⁽³⁴⁾したがってかかる愛は、伝統や民族などの、個人の実体をなしているものによる覚醒と科学的技術的製作との両極を統一するものである。それは、歴史において歴史を超え、時間において永遠に触れるところの創造の根源である。そしてそれは、上述の如き性格・精神をもって祖国を民族を郷土を祖先を子孫を友人同僚等を受する心である。

そして愛は、不断の決意・決断・選択による自己革新の可能性であり、社会的活動と自らの信念ないし信仰との統一や、動的な時間と静的な時間との統一や、実践と熟慮との統一や、アイロニーと真摯との統一などの源泉である。この愛はまた、超越することは常に実現であるという運動の性格をもつものである。

したがって、教育はかかる愛の諸特性を具えた人格の育成を目的とする。理想の人間像もここから考察すべきである。そして結局はこれと同じことであるが、愛に基づく理性の性格をもった人格がここでは理想の人間像の中心となる。特に理性の自覚性と受容性や覚醒作用が重視されなければならない。

また、ヤスパースの包括者思想から演繹すると、教育の目標とする理想の人間とは、次のようなものとなるであろう。それは上述の愛と理性とからの演繹と根本においては一致するものであり、その世界観的具体化なのである。すなわちその理想の人間とは、生命（現存在）をも、科学（意識一般）をも、歴史・伝統・民族・理想（精神）をも、ともに重視すると同時に、それらに絶対の基準を置かずに、しかもそれらを媒介しつつ、そしてそれらを超えて、他の自己との実存の交わりをなしつつ、真理そのもの・存在そのもの・超越者そのもの・包括者そのものに直面して、自由な決断による創造をなす人間である。

教育の内容・方法等に関する根本原理も愛と理性と包括者思想とから引き出しうるのであるが、今は上述の如く、教育の理念を概観するに止めておく。

四 政治と教育との相関

教育は政治の理念に向かって、文化の伝達拡充につとめるとともに、個人の内面の覚醒に訴えて人倫の正しさを実現すべくつとめ、政治は教育の理念に向かって、内面の自覚に訴えるとともに、社会の外的な条件を整えることにつとめる。⁽³⁵⁾教育なしには政治の正しさはなく、政治なしには教育の力は弱い。

民主的な政治の担い手は理性的な各個人であるが、かかる個人の育成は教育の仕事である。「人々が責任を意

識して共同体の決定的な成員となりうるのは、彼らをそうなるように助ける場合のみである。このような助力が、次のような三つの道で遂行されるところの教育によってなされる。⁽³⁶⁾として、トルケッターは教育によって政治がその根底を築かれることを示している。そして、教育の三つの道とは、一、「教授（Unterricht）」によって二、「自己教育（Selbsterziehung）」によって、「三」、「環境の形成（Gestaltung der Umwelt）」によって」ということであるとして、彼は、ヤスパースに忠実に即して、ヤスパースからの引用を通して、それについて述べている。⁽³⁷⁾彼は、「ヤスパースの言おうとすることは、民主的な国家理念の実現は、教育によって、歴史的伝統に關与して来ても自ら自身の根源から生きうるところのこのような人間によってのみ可能であるということである。」⁽³⁸⁾と云う。

ヤスパースは、政治的なものと教育的なものとは互に浸透し合うことを、次のように明らかに示している。すなわち、「民主主義の理念においては、政治そのものが教育である（In der Idee der Demokratie ist die Politik selber Erziehung.）」⁽³⁹⁾しかし以前の、特権階級へと制限された政治と教育（大規模にプラトンによって考えられたような）とはちがって、ここでは全国民の教育が問題である。教育は可能的政治の根拠であるが、またその反対に、超政治的なものからの理性の政治（die Politik der Vernunft aus dem überpolitischen her）

はかかる教育を形づくるのである。その結果は各々の個人において有力に働くようになる。その結果は同時に公的なものをもって私的なものを貫徹するのである。⁽³⁹⁾

政治的自由は超政治的ないし前政治的な実存の自由がなければ現実的なものとして存在しえないとともに、実存の自由は政治的自由がなければ、人間はすべて為すことと生きることにおいて拘束されるから、その実現が不可能となる。⁽⁴⁰⁾それと同じく、政治の教育化と教育の政治化とがともに協力的に、相互に助長し合うように行なわれなければ、真の共同体の現実も真の人間形成も成り立たないのである。しかし、その根底には同一のものがあつた。それは既述の如く、真理と自由、換言すれば、実存の愛と理性である。これに基づいて道徳も科学技術もその他の文化も政治と教育とにおいて真理性を獲得する。

このような実存の愛に基づく理性の根本態度は、「普遍的な共生」（universelles Mitleben）⁽⁴¹⁾であるから、ヤスパースの教育の考え方は、公平無私であり、公明正大であり、万人の教育という考えである。トルケッターも次のように言っている。「ベスタロッツは、貧しい国民が自活するために教育されるべき計画を立てた。ヤスパースはこれに反して、フィヒテのように、全国民の教育を要求し、そしてフィヒテと全く同様に、全人類を改造する教育の力を確信している。ヤスパースによって要求される教育は、世界を変えるべきであり、すべての人

々が、教育に関与しうると同時に、自ら熟考し、考量し、理性的に行動し且つすべての人々自らの人生をしつよく形成するところの意志を伴う場合には、人類を頂点へと導くことになるであろう⁽⁴²⁾と。

そしてプラトンにおける同じように、教育はヤスパースにおいても、哲人政治における教育でなければならぬであろう。「人間の変化は、しかし、その本質上その国民の偉大な教育者（der gross Erzieher seines Volkes）であるところの政治家（Staatsmann）によって可能にされう⁽⁴³⁾」かかる理性的な政治家と理性的な教育者との協力によって、政治と教育とはその正しさを保ちうるであろうし、その進展を期待しうるであろう。しかし、理性的な政治家も理性的な教育者も、決して特定の偉人とか哲人とかではなく、万人がそれである可能の実存として、自らの理性的可能性を實現すべきである。そして両者の協力は実存の交わりにおいてなされるべきである。

五 おわりに

本稿において私は、ヤスパースの政治の理念と教育の理念との異同や関係の洞察を通して、彼における教育の意味への接近を試みたのである。政治と教育との比較と関連の考察によって、いかに同一の思想家の思想体系の諸契機というものは、同一の根からのそれぞれの展開であり、いかにそれらが密接な関連をもつものであるか

が、一層明らかになった。そしてまたそれによって、一層教育の意味も明らかになったのである。

ヤスパースにおいては、人間を現実的に人間とする原動力は政治と教育とである。⁽⁴⁴⁾この両者の協力によって真理・自由に基づく民主的な政治と教育⁽⁴⁵⁾とが進展充実にするのである。

註

- (1) Menschsein ist Menschenwerden. (Karl Jaspers, Einführung in die Philosophie, S. 70)
- (2) 細谷恒夫著『教育の哲学』一九九ページ。
- (3) 同上書二〇〇ページ。
- (4) 同上書二〇一ページ。
- (5) 同上書二〇一―二〇二ページ。ヤスパースも、教育における教育者と被教育者との内面的交渉と被教育者の自己決定性とを述べている (Vgl. Jaspers, Philosophie I, S. 118)。
- (6) 細谷恒夫著『教育の哲学』二〇二ページ。
- (7) ヤスパースは、政治の現実（事実・現象）においても、政治家が真理への意志をもつ場合には力（暴力）のみでなく、自由な相互存在があるという (Jaspers, Kleine Schule des philosophischen Denkens, S. 70)。
- (8) 長田新著『最近の教育哲学』四五―四五二ページ。

- (9) 同上書四五六一四五九ページ参照。
- (10) 「弘前学院大学紀要」第十号所載。
- (11) Karl Jaspers, Wahrheit, Freiheit und Friede, S. 10.
- 以下本書をWFFと略記する。
- (12) Karl Jaspers, Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, S. 197. 以下本書をUZGと略記する。
- (13) ebd. 公明性 (Offenheit) は理性の根本性格である。理性は、自ら進んで真理 (真実・ほんもの) に耳を傾けること、すなわち、それを聞きとること (Vernehmen) という、かかる自発的受容性をその本質的性格としてもっている。
- (14) UZG, S. 198. 「人間の転換」は、ヤスパースにおいては、「内的行動 (内的行為) としての哲学 (すること) によって、なされるのである。そして、かかる転換そのものこそ自由の現実なのである。ヤスパースは、「人間は、カントの理解せる『思考法の革命』 (Revolution der Denkungsart) によって変ったものとなる場合にのみ、滅亡しないであろう。」と云う (Jaspers, Philosophie und Welt, S. 134. in: Kants ›Zum ewigen Frieden‹ 以下本書を と略記する。ヤスパース選集 24 『哲学と世界』、九九ページ (拙訳))
- (15) UZG, S. 198.
- (16) Karl Jaspers, Vernunft und Widervernunft in unserer Zeit, S. 36. 以下本書をWVと略記する。
- (17) WFF, S. 10. (18) ebd. (19) WFF, S. 11. (20) ebd. 『大学』は、「天下国家を治める道の次第を説いた、政治哲学の書であって、『道徳政治相関の理を明らかにし』 (漢文大系、卷、四書解題三ページ、服部宇之吉) たものである。
- (21) Kant, Zum ewigen Frieden. Ein philosophischer Entwurf, 1795.
- (22) ヤスパース著 飯島宗享・細尾登訳『現代の政治意識―原爆と人間の将来―』上巻 (ヤスパース選集 一五) ニページ。
- (23) Vgl. Karl Jaspers, Rechenschaft und Ausblick, S. 318; Karl Jaspers, Die Atombombe und die Zukunft des Menschen, 1957, S. 24. 以下本書をAB, 1957と、一九五八年の同名の大作をAB, 1958とそれぞれ略記する。
- (24) UZG, S. 254. (25) ebd. (26) AB, 1958, S. 253. WFF, S. 12. (27) PW, S. 64. (28) PW, S. 58. (29) ebd. この「愛の人格完成」という場合の愛は、「日本の『教育基本法』第一条にある『真理と正義を愛し』という場合の愛よりもより根源的な立体的真理を意味する。
- (30) かかる愛による、精神性と科学性との統一は、現代並に将来の人類の根本課題であり、教育の根本目標である。

- (5) ヤスハースは、教育と政治とともに、自己変革による本来の自己への生成をめざすとともに、この両者は世界変革の条件であると考える（Vgl. Jaspers, Philosophie I, s. 116）。
- (6) Bernhard Tollkötter, *Erziehung und Selbsten — Das pädagogische Grundproblem im Werk von Karl Jaspers*, S. 139f. 以下本書をESと略記する。
- (7) ES, S. 139f.
- (8) ES, S. 139.
- (9) AB, 1958, S. 447.
- (10) Vgl. AB, 1958, S. 296f.
- (11) Karl Jaspers, *Von der Wahrheit*, S. 115.
- (12) ES, S. 140.
- (13) ES, S. 141. なお、ヤスハース自身、その本質からみて理性的な政治家が偉大な教育者であると云々（AB, 1958, S. 339）とか、政治家は、彼が何を為し何を成さうと、悪いことにおいても善くしようとすも、その国民の教師である（AB, 1958, S. 334）云々（p. 59）。
- (14) Karl Jaspers, *Die geistige Situation der Zeit*, 5. Auflage, S. 85.
- (15) Vgl. AB, 1958, S. 447; ES, S. 138; Karl Jaspers, Kurt Rossmann, *Die Idee der Universität*, 1961, S. 84.

（弘前大学名誉教授・弘前学院大学教授）